SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

文化大革命と大衆運動

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010100

文化大革命と大衆運動

楊　海英

1. 毛沢東とトランプ

米国大統領選でドナルド・トランプ氏が決まった後、中国共産党政府系新聞『人民日報』のタブロイド紙『環球時報』は「アメリカに文化大革命が起こった」との趣旨の社説を出した。皮肉でも批判でもなく、ある意味、中国の本音の吐露だと見ていい。

白人低所得者層には共和党のエリートたちに対する草の根の反感が強かった。資本主義の為に働かされてきた労働者層が犠牲にされ、ごく少数の超富裕層に搾取されている、と大衆は激憤していた。トランプ氏は自身もその金持ちクラブの一員ではあったが、白人の代弁者を演じて当選を果たした。彼は過激な言葉を飛ばしてきたが、「アメリカを再び偉大な国に」とのフレーズは中国の習近平総書記が声高く叫ぶ「中華民族の偉大な復興」と響きが同じだけでなく、国粋主義的で、自民族中心（エスノセンドリズム）的な性質もまた同じだ。習近平が精神的、思想的な師として仰ぐ毛沢東こそが、20世紀最大の大衆煽動の政治家で、最大規模の大衆運動を発動した人物である。大衆迎合のポピュリズムの迎合家としては、ヒトラーも毛の先輩と言えるかもしれないが、ナチズムは全人類を敵に回した結果、徹底的に否定されたが、毛沢東思想や今日のトランプ流大衆煽動思想は逆に世界各地で沸き起こっているのに注視しつづける必要があろう。

2. 暴力の横行と責任の転嫁

経済的に搾取され、政治的に抑圧されてきた人民を解放した、と1949年に宣言した毛沢東の中華人民共和国は実は新しい階級制度で人びとを再編した国家だった。労働者と貧しい農民、それに革命的幹部と革命的軍人、革命的烈士は「紅い五類」の身分で、地主と富農や知識人らは逆に「黒い五種類の人間」にカウントされ、厳しい政治的社会的差別を受けた。幹部の子は自然に幹部となり、「党と国家の継承者」として権力の座に就く。こうした封建的な血統主義の思想は1966年に文化大革命（以下、文革）が発動されると、「父親が英雄であれば、その子も好漢だ。父親が反革命であれば、その子も馬鹿だ」とのスローガンとして高級幹部の子弟らから出されて、一世を風靡した。

この「革命的血統論」を信奉する高級幹部の子弟らに対し、一般庶民の家庭に生

まれた青少年たちは強烈な反感を示し、「出身論」で人生を決定するのは封建的思想の残滓だとして反論した。先頭に立って論陣を張ったのは湖南省出身の遇羅克という青年だったが、彼は1968年に逮捕され、最終的には毛沢東の暗殺を企てたとされて二年後に処刑された。共産党政権の本質は革命の外套を纏った、新しい差別的制度だと社会主義の性質を暴露したからである。

それでも、毛沢東は無数の庶民の子弟から集めた青少年を自身の政敵を一掃する突撃隊として利用した。建国後17年経っても、社会主義が予想通りに上手く運営できないのは、「自身の身辺に眠る、フルシチョフのような走資派がいるからだ」、と毛は判断した。スターリンの死後に大量虐殺をはじめとする数々の暴虐を暴露したフルシチョフは「アメリカ帝国主義との平和共存」路線に舵を切ろうとしていた。毛は、自身の死後中国からも社会主義を放棄して資本主義の道を歩む「走資派」が現れるのではないか、と妄想した。その筆頭が劉少奇と鄧小平だと見た毛は、未熟な青少年と大衆を動員して彼らを追放した。青少年たちも毛の煽動に乗せられて、「紅い社会主義を衛る近衛兵」こと紅衛兵に変身していた。毛は「紅衛兵の最高司令官」を自任していたし、紅衛兵もまた多くの暴力を「革命」として駆使した。

ここで一つの誤解を解く必要があろう。

紅衛兵は初期の老紅衛兵と造反派紅衛兵に分かれる。老紅衛兵は高級幹部の子弟から成り、造反派紅衛兵は一般の庶民の子どもで構成されていた。山東省にあった孔子の墓を破壊したり、北京市内で人間を殺害してから、その血で壁に「紅色恐怖(テロ)万歳」と書いたりしたのはすべて老紅衛兵だ。老紅衛兵も造反派も毛の政敵が一掃された後は例外なく農山村へと下放されたが、文革終息後に党と政府の幹部となったのは、老紅衛兵たちだ。老紅衛兵たちは「革命的血統論」を実現させた後に「太子党」を形成して党と国家の全権力を掌握しただけでなく、文革中の暴虐など諸悪の根源をすべて造反派に転嫁した。かくして、「全人類の解放」を目指した文革は終わっても、庶民の子弟は相変わらず身分制度の最底辺に固定されたままである。

3. 実態としての文革

文革中の中国で何が発生したのかについても、近年明らかになってきた。例えば南部の広西チワン族自治区では10万人以上もの庶民が人民解放軍と政府によって組織的に虐殺されたし、「反革命分子」とされた者が革命的な幹部たちに食べられた事例も200件以上、報告されている。一体、どれくらいの幹部が食人に関わったかも不明だが、1983年に公表された政府の公式見解では、食人行為があったとして処分を受けた共産党員だけで47,671人に上っていた（暁明著『広西文革痛史鉤沈』、2006年）。広西はその名の通り、チワン族の自治区だが、食人が主として漢民族地域で横行し

ていた事実は政府に大きな衝撃を与えた。また、アメリカ在住の著名な文革研究者宋永毅教授が今年公開した『広西文革機密档案資料』（36巻）によると、政府幹部と解放軍は庶民の女性に対し、組織的な性犯罪を長期間にわたって働いていた事実も判明した。宋教授は11月6日に学習院女子大学で開かれた文革に関する国際シンポジウム（静岡大学と共催）の席上でも、広西における政府主導の性的犯罪についての研究成果を披露した。

政府と人民解放軍が働いた性的犯罪は、モンゴル人か住む内モンゴル自治区でも見られた。性的犯罪だけでなく、内モンゴルでは34万人のモンゴル人が逮捕され、27,900人が殺害され、12万人が暴力を受けて身体障がい者となった。文革当時のモンゴル人の人口は150万人弱なので、平均して一つの家庭から一人が逮捕され、53人に一人が殺害されたことになる。むろん、これは政府が公表したデータに基づく計算だが、欧米の研究者と内モンゴル自治区のモンゴル人研究者たちは、殺害されたモンゴル人は10万人に達するとの報告書を出している。犠牲者の数も重要だが、モンゴル人だけが政府と漢民族によって一方的に虐殺された事実を当事者はジェノサイドだと理解している。文革が10年も続いた結果、全国でおよそ1億人が被害を受け、200万人近い死者が出た、と最新の研究成果は示している。

4. ポピュリズムの禍根

国内だけでなく、毛沢東はまた革命思想を世界に輸出し、他国の内政に干渉してきた。その思想を受けた日本の青年たちの一派は「農村から都市を包囲」しようとして1972年に「あさま山荘事件」を起こしたし、ペルーのセンデロ・ルミノソは1990年代まで武力闘争を展開した。この種の暴力「革命」は多数あるが、その後遺症は今も国際関係に陰影を投じている。

文革の推移を振り返ってみると、毛に動員された大衆（一般の人民と造反派紅衛兵等）は彼の政治的目標が達成された段階で、最終的に捨てられた。ヒトラーのナチズムは完全に否定されたが、それを大なり小なり、さまざまな形で支え、あるいはそれを許す土壌を用意したドイツ人は永世反省の境地に追いこまれた。中国の場合だと、政府は毛の死去後に文革の終結を宣言し、一度は失脚した鄧小平によって部分的に否定もされたが、真相究明には着手してこなかった。その為、文革の加害者と被害者の間には真相究明に基づく和解も成立しないで今日に至る。これも、大衆煽動が残した禍根と言えよう。

備考：『週刊　東洋経済』2016年12月24日号所載。